

氏名	北 夏子
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 甲 第 7601 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ベルグソン哲学に対する H. スпенサーの影響の研究

主査	筑波大学 教授	Ph.D.	鬼界彰夫
副査	筑波大学 准教授	博士（文学）	橋本康二
副査	筑波大学 准教授	Ph.D.	津崎良典
副査	東北大学 准教授	博士（哲学）	村山達也

## 論文の要旨

本論文はベルグソン哲学に対するハーバード・スペンサーの影響に関する研究である。ベルグソンは最晩年の回顧的著作『思想と動くもの』の「緒論」において自己の思想的な経歴を叙述する箇所で、極めて若いころに一時 H. スペンサーの哲学に傾倒していたが、あるきっかけでスペンサーの思想に満足できなくなり、スペンサーには無い時間論を通じて独自の思想を確立するに至った、と述べている。有名なこの箇所の影響もあり、これまでベルグソン研究者の大半は、ベルグソンに対するスペンサーの思想的影響は否定的なものに限られ、その成熟期の思想に対する積極的寄与・影響は存在しないと考えてきた。本研究は、杉山直樹氏ら少数の先駆的研究を手掛かりとし、『思想と動くもの』の自伝的記述を一旦括弧に入れ、ベルグソン最初期の講義録から主著『創造的進化』に至るベルグソン自身の論述、とりわけスペンサーに関する論述、言及を丁寧に原典上でたどり、同時にそこで言及されていると推測されるスペンサー自身の著作の原典に当たり、両者を対照することにより、これまで想定されていた以上のスペンサーからの影響の存在を実証的に探る研究である。より具体的には本論は、検証すべきテーゼとして次の二つを立てる。

A. ベルグソンの哲学に対してスペンサーの思想は、既存の研究で明らかにされてきた以上に影響している。その影響はとりわけ「共感」という概念を介して見られる。

B. 『思想と動くもの』の「緒論」におけるスペンサーとの関係に関するベルグソンの記述において最も重要なのは「補足」という概念であり、ベルグソンのスペンサーからの影響の帰結をここに見ることができる。

両テーゼを裏付けるための具体的な分析は第三章から第八章において行われる。第三章では近年フランスで編集出版された二十歳代にベルグソンがリセで行った講義録が分析され、スペンサーに対していくつかの言及がなされ、そのあるものは肯定的で、あるものは否定的であることが示される。哲学史の講義ではスペンサーの進化論哲学の中心概念である「異質化」が古代ギリシャの哲学者アナクシマンドロスの「分離」に比較され、

イギリス哲学史ではスペンサーの仕事を「科学の哲学」の試みとして肯定的に評価していることが示される。他方心理学講義では、諸感覚を要素的な感覚の組み合わせに還元しようとするスペンサーの試みは、科学の感覚への応用であるが、それは適切な方法ではないとベルグソンが考えていることが示される。これにより著者は、『思想と動くもの』でのベルグソンの叙述は正確ではなく、この時期からベルグソンのスペンサーに対する関係は賛否相混じった複雑なものであることを主張する。第四章、第五章ではベルグソンの最初の著書『意識に直接与えられたものについての試論—時間と自由』（『直接与件』）でスペンサーに触れられている二つの箇所（「優美」、「恐怖」）の叙述が、対応するスペンサーのテキストと綿密に対照された結果、優美に関するベルグソンの叙述と思想へのスペンサーからの影響が決定的であることが示される。すなわちこの叙述においてベルグソンはダンサーの運動を例として論じているが、スペンサーはフィギュアスケーターの運動を例に取り上げているし、我々がダンサーの運動を優美と感じる背景には我々とダンサーの間に共感が存在する、としているが、共感を用いた同様の説明をスペンサーも行っていることが示される。この説明においてベルグソンがスペンサーの説明の不十分さを指摘しているが、実際には両者の説明がきわめて類似していること、これはスペンサーからの積極的影響とか考えられないことが示される。

第六章から第八章では、ベルグソンの主著『創造的進化』が章ごとに綿密に分析され、同時にそこに現れるスペンサーへの批判・言及が分析され、成熟期のベルグソンの思想全体にとってスペンサー思想とその評価がどのように位置付けられるかを明らかにすることが試みられる。第六章では、ベルグソン自身の進化観とスペンサーの進化観に対するベルグソンの批判が比較対照され、ベルグソンにとってスペンサーの進化主義哲学は、すでに出来上がった進化の結果を後付的に再構成するにすぎず、新しい存在の生成過程そのものを捉えられない偽進化主義とみなされたことが示される。それに対してベルグソン自身の進化観とは、進化の過程の背景に「生の本源的弾み」が存在し、進化とはこの普遍的傾向が予測不能なものを生成する過程と考えるものであることが示される。そしてスペンサーの方法が知性による現象の再構成であり、それこそが科学の本質であること、そしてスペンサーの進化主義哲学は、生命の進化という過程を理解する上での科学的方法、科学的知識の限界を示していることが述べられる。第七章では生物界に広く存在する知性と本能という二つの能力の起源に関するベルグソンの叙述が分析され、人間において極限に達する知性の本質は物を制作する能力であり、事物を固定化し、全体を部分へと分割し、それで全体を再構成する能力であり、それゆえ知性はその本性上生命を理解できないとベルグソンが主張していること、それに対して本能とはある種の共感であり、この共感に反省が加われば、ありのままの生命の叙述を我々が行える可能性が存在すると主張していること、そしてこうした生命の探求は美的能力に基づいた美的研究と類似するものであると主張していることが示される。第八章前半では、『創造的進化』第三章におけるベルグソン自身の知性発生論とスペンサーの知性発生論の比較が分析される。その結果ベルグソンによるとスペンサーの知性発生論は、知性を説明する上で知性の対象となる物質概念を前提としているが、それらが等しく由来する根源を探ることこそが問題であり、それは生命の固形化である知性の働きに基づくスペンサーの科学主義的思考によっては本質的に実現できないことものであることが示される。それに対してベルグソン自身は、知性により固形化されたものの脱固形化と流動する生命の流れへの回帰こそが本来の哲学であり、自らが試みていることだと考えていることが示される。第八章後半では『創造的進化』第四章におけるスペンサー論が分析され、ベルグソンとスペンサーの哲学的な相互関係を定位することが試みられる。そこでベルグソンが語るのは、若きベルグソンを含め多くの19世紀の哲学者はスペンサーの登場によって、変化と生成そのものの説明が与えられることを期待したが、現実にスペンサーの提供した物は生成された結果の再構成にすぎず、それは知性とその対象である物質の存在を説明するのではなく、前提しているに過ぎなかった、それに対してベルグソン自身の真の進化論主義は、相補的である知性の構成図式と物質の分割様式を等しく生み出す過程を捉えるものであり、時間と純粹持続の叙述を通じて初めてそれは可能と

なるということである。著者はここでのベルグソンの「相補性」という概念に注目し、この関係が「生の根源的な弾み」に含まれる二要素としての知性と本能（共感）の間に成立することを示し、そこからベルグソンの哲学（生の哲学）とスペンサーの哲学（科学的進化主義）は相対立するのではなく、むしろ知性と共感のごとく相補うものであるという結論を導く。

以上の分析と考察に基づき結論において著者は、第四章の「優美」に関する分析からテーゼAが確立されたこと、第六章から第八章の分析によってテーゼBも確立されたこと、それゆえベルグソン哲学とスペンサー哲学は相補うものであることが結論として導かれる。さらにここからベルグソンから「差異」を中心概念として取り出したドゥールーズの解釈は、ベルグソンにとっての「共感」概念の重要性を無視しているという点において再検討されるべきものであることが主張される。

## 審査の要旨

### 1 批評

本論文は、スペンサーからベルグソンへの影響を、ベルグソンによるスペンサーへの言及に加えて、そこで参照されているスペンサー自身のテキストにさかのぼって検証し、ベルグソンとスペンサーの間には、大多数の研究者によって想定されていた、そしてベルグソン自身が明言する否定的な影響だけでなく、肯定的な影響もまた存在し、それは「共感」と「相補性」という概念を介してもたらされたということを説得的に示すものである。この点において本論は問題設定と両テキストの比較対象という研究方法において画期的であり、提示された結論において独創的である。ただし「相補性」という概念を介してベルグソンの著作に残された多様なスペンサーの痕跡を、成熟したベルグソンの思想の構造の中へ位置付ける作業はいまだ不十分であり、テーゼそのものの再明確化と更なる検証が必要である。とはいえ全体として本論文は間違いなくベルグソン研究という領域における独創性を持つ極めて高い水準の研究成果を示すものであり、博士論文にふさわしい内容を持つ。

### 2 最終試験

平成28年2月1日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。